

K. Mannheim における社会化の概念

— 変動要因 (媒介原理) を中心として —

松崎 信也 (大阪教育大学大学院)

(1) 本発表は、K. Mannheim (1893~1947) の理論内の媒介原理 (Principia Media 羅) を中心として、人間形成の側面において、我々が学ぶべきものは何であるのかを明らかにしようとする試みである。ここで、社会化理論は、多く、Parsons を中心とする研究者によって確證的な発展をとげているが、しかし、社会変動に対する側面に関しては不十分である。

この媒介原理は「ある意味で一種の規則的に現われる特殊な法則であり、特定の社会枠内におけるある歴史的局面的特殊な諸関係である。」しかしながら、このように媒介原理を特殊化することは、社会化理論そのものを特殊化するくらいが生じないわけではないが人間における社会化が個性化を含むと解すれば、この考え方はまちがいでない。

Mannheim の言うごとく、媒介原理は「ある時の所与の場合において働いている種々の要因から統合されるような具体的状況における普遍的な力である。」同時に、特定の社会の特定の時期におけるこの媒介原理は、社会化理論を変動過程における個々人のパースナリティの水準にまで探究することを可能にさせる。個々人が、そのまわりの外世界を理解しようとする場合、個々人は、この媒介原理を無意識に使用することによって社会化される。さらに、人間形成における心理的媒介原理が社会構造の媒介原理とうまく整合 (coordination) するとき効果は倍化される。

媒介原理は、多元的であり、それぞれが緊密にかみあっているので単一の原因を表わす要因として作用する。言い換えれば、「一つの時期は、一つの媒介原理によって支配さ

れているのではなくて、それらの全系列によって支配されているのである。」この多元性のゆえに、媒介原理が動的に変化し、さらにこの媒介原理が歴史性を含むことによって、変動過程における人間の社会化の把握が可能となる。

(2) これらの媒介原理は、相互に関連しあって構造 (structure) を形成する。Mannheim における構造の重要性は多くの Mannheim 研究者によって指摘されている。(例えば、池田秀男、Paul Kecskemeti、Thelma Z. Lavine 等) しかしながら、媒介原理 = 構造連関内の原理を社会化理論との対応では残念ながら語られていない。社会化の過程は、人間を対象にして、その個々人が住んでいる環境との構造連関の中での社会に適応し、社会的自覚を獲得していく過程である。言い換えれば、社会の側から人間に必要な知識を獲得させていく過程であるとも言えよう。また、社会化の構造は、横断面で切れば、社会的拘束の構造でもある。この社会的拘束は社会的統制と結合して、社会的維持機能の構造連関の一側面を担っている。本発表では、社会化の概念にのみ焦点をあて、社会統制にまで言及しない。

(3) Mannheim に従えば、人間形成の方法には、外面的変形法 (external method of transformation) と内的変形法 (internal method of transformation) とが存在する。

外面的変形法は、社会構造および外部的行動の大量的変形に係わり、歴史的人間類型に対応する特徴に従って統合する。この場合大衆社会状況の把握とそれに続く状況の診断の研究へと進む。

他方、内面的変形法は経験の層化 (Erlebnis-schichtung) を前提として Mannheim は考えている。Mannheim においては、パースナリティ構造を S. Freud、G. Simmel の考えに依拠している。この精神構造の把握のゆえに、人間の「後の経験は、この最初の経験層の確認や充足するものとして表われるにせよ、あるいは、初期経験層の否定や媒介として表われるにせよ、すべてこの経験群からわかる。」人間の思考法は、この初期経験を中心として相互作用的に発展するものと考えられる。しかしながら、初期経験をあまり重視するのはいけないが、反対に無視しすぎるのもいけない。

これら二つの変形法の考えの根本になっているのは、人間におけるパースナリティが人間の存在要因である制度化された現存の社会秩序によって影響を受け、さらにパースナリティの深層にまで影響づける外から内へという公式による。つまり、人間のパースナリティそのものが存在によって拘束されているという知識社会学の命題にまでさかのぼるのである。

(4) 「現代の教育は、徐々にではあるが、意識的に技巧、知識、そして技術の伝達のみならず、性格形成の媒介原理をも計画し始めている。」この媒介原理の計画によって、社会構造の基礎となる原理でさえ変形されるようになる。結果として、社会化理論において、この媒介原理の有用性があきらかとなった。

媒介原理を軸として、存在としての教育環境は、我々の考えるかぎり、児童、生徒の発達を促進させ、彼らの生活を充実させ、知的開発を目ざすことに終始していた。そして、社会構造、学校構造、家族構造の整合、さらには、これらの構造と人間のパースナリティ構造の機能的な整合により、よき方向へ教育環

境を整備する方向へと進むべきであろうと考える。

Mannheim の functionalism は、T. Parsons のように生物学的有機主義にあるのではなく、むしろ、E. Troeltsch の言う文化総合という歴史主義にある。

《主要参考文献》

- *Man and Society in an age of reconstruction* (1940)
by Karl Mannheim 訳 福武直
- "Karl Mannheim and contemporary functionalism"
by Thelma Z. Lavine
Towards the Sociology of knowledge 所収 (1973)
(ed. Gunter W. Remmling) RP245-257
- *Das Problem der Generationen* (1927)
von Karl Mannheim